

Publication Manual of the American Psychological Associationの英文法記述について

江藤裕之*1

【要旨】 言語事実の記述・分析により、言語の本質を追及することを目指す今日の科学的言語学において、「文法」は規範文法——言葉による正確な自己表現を可能にするためのルール——を意味しない。しかし、思考内容を正しく文章に表現するための技術への要請は消滅することなく、その伝統は文章読本、論文執筆マニュアルといった形で続いている。本稿では、今日を代表する英語論文執筆マニュアルであるアメリカ心理学会発行の *Publication Manual of the American Psychological Association* の“grammar”の項目で扱われている文法事項の例文を取り上げ、それぞれの記述内容の解説を通じて、内容の正確な伝達を目的としたルール集としての文法の伝統が、今日の一般的な論文執筆マニュアルに引き継がれていることを確認する。

【キーワード】 規範文法、論文執筆マニュアル、アメリカ心理学会、APA マニュアル、英語教育

18世紀末、英国で成立した規範英文典における English grammar の一般的定義は、the art of speaking and writing the English language with propriety [英語を作法通りに話し、書く技術] (Murray, 1795) であった (Eto, 1997)。この定義で興味深いのは、「聞く、読む」というインプットの観点からではなく、「話す、書く」というアウトプットの視点から「文法」が定義されていることである。もちろん、これは英語を母国語とする人たちに対しての英文法の定義であるから当然のことなのかもしれない。それは、外国語を読み理解するためにはその語の文法知識は必須であっても、母国語を読む際には特に文法の知識は必要とはされないからである。母国語の文法や文章構成のルールを意識することがあるとすれば、それは文章を書く際、つまり、文章により自己を表現する時である。そこで必要とされるのが「規範文法 (prescriptive grammar)」であり、それは言葉の決まりや表現 (作文) 技術のルールが「前もって、書かれて (prescribe)」いる文法のことを言う。

今日の科学的な言語学——「あるべき」という言語規範ではなく、「である」という言語事実を記述・分析し言語の本質を追及する科学——においては、grammar という語はルールブックを意味せず、言語を生成し規定する仕組みとして、つまり、言語の本質解明の道具として解釈されている (Pinker, 1994)。このような文法観が支配する現代の言語学においては、理論面においても実践面においても、「規範的なルールブック」という意味での「文法」は存在しえない。

しかし、このように「文法」が学問的な意味で「規範文法」を意味しなくなった今日においてさえも、思考内容を言葉で正確に伝える技術への要請は消滅したわけではない。この伝統は、style manual, writing manual といった「文章読本」の中で今日もなお命脈を保っている。文章作法のルールブックとしては、例えば、“the little book” というニックネームで親しまれている *The Elements of Style* (Strunk, White, 2000) は一般向け writing manual の古典としての評価を受けており、また学術論文作成における style manual と

*1 長野県看護大学
2002年11月17日受付

しては *Publication Manual of the American Psychological Association* (American Psychological Association, 2001), *MLA Handbook for Writers of Research Papers* (Gibaldi, 2003) がある。他に、ジャーナリスト向け、作家向け、学生のペーパー作成用などなどさまざまな「英語文章読本」がある。

本稿では、今日の一般的な学術論文執筆マニュアルが、内容の正確な伝達を目的とした英語表現法のルールブックとしての役割を担っていることを見ていく。そこで、分析資料として、自然科学系を中心に英語論文の執筆マニュアルとしては定評のあるアメリカ心理学会 (American Psychological Association, 以下 APA) 発行の *Publication Manual of the American Psychological Association* (5th edition, 以下 APA Manual) の“Grammar”の項目に扱われている文法事項の例文 (原則として各項目一例のみ) を取り上げ、それぞれの記述内容の解説を試みようとする (引用例文の下線, および例文に続く [] 内に示した例文の意図解説は現筆者による。なお, 引用例文には APA Manual のページ数を付さない)。

APA Manualにおける grammar 解説

APA Manual は学術論文の執筆から出版に至るまでの、基本知識、心構え、技術、必須の情報などをこと細かく解説したマニュアル本であり、多くの学術誌——特に自然科学系分野——が APA Manual を論文執筆要綱に指定している。

439 ページもの大著である APA Manual の中で、“Grammar”の項は 22 ページ (pp. 40–61) と少ない。言うまでもないが APA Manual の目的は英文法の体系的解説ではないので、そこでの文法はあくまでも正しく文意を伝達し、混乱や意味の曖昧さを排し、簡潔明瞭な文章を書くという視点から重要な事項のみが扱われている。つまり、文法項目全体を網羅するのではなく、あくまでも「APA ジャーナルの投稿原稿に頻出する文法・語法の問題」なのである。

APA Manual の“Grammar”の構成は次のとおり：Verbs [動詞], Agreements of Subject and Verb [主語と動詞の一致], Pronouns [代名詞], Misplaced

and Dangling Modifiers and Use of Adverbs [修飾語の位置, 副詞の使い方], Relative Pronouns and Subordinate Conjunctions [関係代名詞と従属接続詞], Parallel Construction [並列構造], Linguistic Devices [修辭的技巧]。最後の, Linguistic Devices の項目では、学術論文に不似合いな文学的表現 (韻, メタファー) や隠語の多用を戒めた箇所であり、いわゆる文法事項についての言及はないので、ここでは扱わない。

1. 動詞

動詞に関しての注意は、「態」「時制」「法」である。まず、「態」に関してであるが、受動態よりも能動態の使用を勧めている。

悪い例: The survey was conducted in a controlled setting.

良い例: We conducted the survey in a controlled setting.

[能動態の方が動作主が明確となり、簡潔で文意の正確な表現になる]

受動態の使用は、The speakers were attached to either side of the chair. の場合のように「行為をする側よりも、行為を受ける対象に焦点を当てたいとき」にのみ使用する。

「時制」に関しては、過去形と現在完了形の使用についての注意が言及されている。

誤: Sanchez (2000) presents the same results.

正: Sanchez (2000) presented the same results.

[他研究者の考察や、自分の調査・実験結果の報告には過去形を使用]

誤: Since that time, investigators from several studies used this method.

正: Since that time, investigators from several studies have used this method.

[過去の現象が現在まで継続している場合は現在完了形を使用]

また、論文中の「結果 (Results)」の項目には過去形を用い、「考察 (Discussion)」の項目には現在形を用いるようにとの細かな注意もある。

Results の項目: In Experiment 2, response varied (see Figure 4).

Discussionの項目: As demonstrated in
Experiment 2, response varies...

これは、実験・調査結果という純然たる「過去の事実」を示す場合と、考察における「現状・現在の事実」としての表現を明確に分けるためである。

動詞の最後ある「法」に関する項目では、仮定法(叙想法)の使用に関する注意と、wouldを婉曲的に使うことを戒めている。

誤: If the experiment was not designed this way,...

正: If the experiment were not designed this way,...

[仮定法(叙想法)は事実に反する仮想や、起こりえない条件を述べる場合にのみ使用]

ここで注目すべき点は、wasを誤りとしwereを正しいとしている点である。最近の口語表現ではif he was a birdのようにwasを使用する傾向があるため、一部の文法家はwasも正用法として認めている。しかし、正確な文章表記を目標とするAPA Manualでは「事実に反する仮想や、現実には起こりえない条件を表現する」際にはwereという伝統的な用法を正しいとしている点が興味深い。

2. 主語と動詞の一致 (Agreement of Subject and Verb)

この場合の「一致」は「数の一致」であることは言うまでもないが、統語的、語形的に数が把握しにくい主語についての注意がなされている。

誤: The percentage of correct responses as well as the speed of the responses increase...

正: The percentage of correct responses as well as the speed of the responses increases...

[percentage (単数) が主語なので動詞はincreasesとなる。together with, including, plus, as well asでは主語の位置に注意]

誤: The data indicates that Terrence was correct.

正: The data indicate that Terrence was correct.
[語尾が-aの外来語(ギリシア語・ラテン語系)名詞の複数形には注意]

似た表現でも単数・複数の相違が生じる場合として以下の例を挙げている。

The number of people in the state is growing.

A number of people are watching.

[前者の主語はnumber(単数), 後者の主語はpeople(複数)]

A pair of animals was in each cage.

A pair of animals were then yoked.

[前者はpair(単数)が主語, 後者はanimals(複数)が主語]

The couple is surrounded.

The couple are separated.

[coupleのような集合名詞(series, set, faculty, pairなど)はグループ全体をひとつのまとまりとしてとらえると単数とみなし(前者の例), グループ内の個々の構成員に焦点を当てると複数とみなす(後者の例)]

文法上, 単数・複数の区別が難しいnoneは次のように明解に区分されている。

文脈上単数: None of the information was correct.

文脈上複数: None of the children were finished in the time allotted.

Cf.: No one of the children was finished in the time allotted.

[noneの後に単数名詞(information)が後に続く場合はnoneを単数, 複数名詞(children)が後に続く場合はnoneを複数と見なし, 「ひとりも~ない」の意味の場合はnot one(数は単数)を用いる]

「一致」の最後では, 主語がorやnorで結ばれて判別が付きにくい場合や, 1つの文中に2つ以上の主語がある場合の注意がなされている。

誤: Neither the participants nor the confederate were in the room,

正: Neither the participants nor the confederate was in the room,

Neither the confederate nor the participants were in the room,

[主語がorやnorで結ばれる場合は, 意味的に主語を判別しにくいので, 動詞に近いほうの名詞の数に合わせる]

3. 代名詞

代名詞に関しても「一致」が問題にされている。ただし、この場合は「数の一致」のみならず「性の一致」も含まれている。

「数の一致」は代名詞とそれが指す名詞との数（単数・複数）の一致である。

誤: It is unlikely that any sexualized transference will be resolved successfully if the patient does not feel that interactions with their therapist are confidential.

正: It is unlikely that any sexualized transference will be resolved successfully if the patient does not feel that interactions with his or her therapist are confidential.

[the patient (単数) を受けているので、代名詞 their (複数) は誤りで単数表現の his or her が正しい]

「性の一致」では、代名詞とそれが指す名詞との性（男性・女性・性なし）の一致が問題となる。この原則は関係代名詞にも適用される。英語の場合は、もちろん文法性が消滅しているので自然性のみが問題となる。

誤: The rats who completed the task successfully were rewarded.

正: The rats that completed the task successfully were rewarded. [ratsは性なし（ここでは人間ではない）なのでthatを使用する]

関係代名詞に関しては、主格には who、動詞・前置詞の目的語になるもの（目的格）には whom を用いて区別する。

誤: Name the participant whom you found achieved scores above the median.

正: Name the participant who you found achieved scores above the median.

[関係詞以下の部分を独立して書くと、You found he achieved...となる。つまり、ここではheに対応する主格（主語になる）の関係代名詞 who を使用する] 代名詞や名詞が～ing形を伴う場合は以下の注意がある。

誤: We had nothing to do with them being the

winners.

正: We had nothing to do with their being the winners.

[動名詞の意味上の主語は所有格 (their) を用いる]

正: We spoke to the person sitting at the table.

[sitting at the tableがthe personを修飾しているのでthe person'sにはならない]

4. 修飾語の位置, 副詞の使い方

修飾語の位置に関しては、形容詞・副詞（句・節）と被修飾語との関係を明瞭に示すために語順（修飾語の位置）についての注意を述べている。

不明瞭: The investigator tested the participants using this procedure.

[using this procedureの部分がどこを修飾しているは不明。つまり、下線部の意味上の主語がthe investigatorともthe participantsとも取れる]

明瞭: Using this procedure, the investigator tested the participants.

[using this procedureはthe investigator tested the participants.全体を修飾していることが明瞭]

The investigator tested the participants who were using the procedure.

[who were using this procedureはthe participantsを修飾していることが明瞭]

解釈上、誤解しやすい語にonlyがあるが、APA Manualでは「onlyは修飾する語の直前に置く」と明示されている。

誤: These data only provide a partial answer.

正: These data provide only a partial answer.

[onlyはprovideではなく、a partial answerを修飾] 「懸垂修飾語（分詞構文など）」がどの部分を修飾しているか明瞭にするため——動詞の意味を含む語の意味上の主語を明確にするため——受身の文ではなく、能動文を用いるを推奨している。

誤: After separating the participants into groups, Group A was tested.

[separate the participants into groupsの意味上の主語がGroup Aとなるので誤り]

正: After separating the participants into groups,

I tested Group A.

[separate the participants into groupsの意味上の主語はIとなり、意味的に問題ない]

文修飾の副詞 (fortunately, similarly, certainly, consequently, conversely, regrettablyなどの導入語、接続語としての副詞) の使用は、その語がどの部分を修飾しているか不明瞭な場合があるので注意する。

問題あり: Interestingly, the total amount of available long-term memory activation, and not the rate of separating activation, drives the rate and probability of retrieval.

好ましい: We were surprised to learn that the total...

We find it interesting that the total...

An interesting finding was that...

[surprisinglyという表現よりも We were surprised to...や、interestinglyよりも We find it interesting that..., An interesting finding was that...などを使用したほうが意味が簡潔明瞭に伝わる]

この項の最後に、hopefullyをI hopeやit is hopedの意味では使用しないようにとの注記がある。hopefullyはあくまでもin a hopeful mannerやfull of hopeの意味で使用することが明記されている。

5. 関係代名詞と従属接続詞

関係代名詞に関しては非制限用法(追叙用法)と、制限用法の区別について論じている。APA Manualでは制限用法にはthatを用い、非制限用法(追叙用法)にはwhichを用いることを推奨している。これは、確かに便宜的ではあるものの、徹底すれば混乱をさけることの可能な便利な区分である。

非制限用法: The animals, which performed well in the first experiment, were not proficient in the second experiment.

[which performed well in the first experimentは非制限用法(追叙用法)であり、この部分が省略されても全体の意味に支障はない。このような非制限用法の場合は、関係代名詞whichを用いて、制限用法の関係代名詞thatと区別する]

制限用法: The animals that performed well in

the first experiment were not proficient in the second experiment.

[that performed well in the first experimentの部分は限定用法であり、直前のthe animalsの意味を限定しているの、この部分を省略すると全体の意味に支障をきたす。このような限定用法の場合は関係代名詞thatを使って非制限用法の関係代名詞whichと区別する]

接続詞(従属接続詞)に関しては、一つの接続詞に意味用法が複数存在する場合、意味を一つに限定して使用し、意味的曖昧さが生じないように指導している。

Bragg (1965) found that participants performed well while listening to music.

Several versions of the test have been developed since the test was first introduced.

[whileやsinceは「時間」の用法に限って使用する]

誤: Bragg (1965) found that participants performed well, while Bohr (1969) found that participants did poorly.

正: Bragg (1965) found that participants performed well, whereas Bohr (1969) found that participants did poorly.

[whileは同時性の意味に使用する、「～だが、一方では」の意味としてはwhileではなく、although, whereas, and, butなどを使う]

誤: Data for 2 participants were incomplete since these participants did not report for follow-up testing.

正: Data for 2 participants were incomplete because these participants did not report for follow-up testing.

[sinceは「時間」の意味に限定し、「～なので」という理由を表す場合はbecauseを使用する]

6. 並列構造

最後には並列(対関係)の構造をもつ文における注目が述べられている。文中で対の関係(文法的にequivalentの関係)になる部分は、同じ語形や文構造で並列するというのが大原則である。

誤: The results show that such changes could be

made without affecting error rate and latencies continued to decrease over time.

正:The results show that such changes could be made without affecting error rate and that latencies continued to decrease over time.

[and以降もshowにかかる節なのでand thatと、接続詞のthatが必要]

以下の例は、between A and Bなどの文型で語句を並列する際に、AとBに入る要素の形を合わせることに注意を示したものである。

誤: We recorded the difference between the performance of subjects that completed the first task and the second task.

正: We recorded the difference between the performance of subjects that completed the first task and the performance of those that completed the second task.

[between A and BのAとBに入る語句は対の形(同じ形)にする]

誤: The names were both difficult to pronounce and spell.

正: The names were difficult both to pronounce and to spell.

[both A and BのAとBに入る語句は対の形(同じ形)にする]

誤: Neither the responses to the auditory stimuli nor to the tactile stimuli were repeated.

正: Neither the responses to the auditory stimuli nor the responses to the tactile stimuli were repeated

[neither A nor BのAとBに入る語句は対の形(同じ形)にする]

誤: The respondents either gave the worst answer or the best answer.

正: The respondents either gave the worst answer or gave the best answer.

The respondents gave either the worst answer or the best answer.

[either A or BのAとBに入る語句は対の形(同じ形)にする]

誤:It is not only surprising that pencil-and-paper scores predicted this result but that all other predictors were less accurate.

正:It is surprising not only that pencil-and-paper scores predicted this result but (also) that all other predictors were less accurate.

[not only A but also BのAとBに入る語句は対の形(同じ形)にする]

また、並列構造の場合、統語上の問題のみならず、内容的に連続する要素は、語形・文構造も同じにする。

誤: The participants were told to make themselves comfortable, to read the instructions, and that they should ask about anything they did not understand.

正: The participants were told to make themselves comfortable, to read the instructions, and to ask about anything they did not understand.

[対比の構造をしている場合は形を同じにしなくてはならず、この場合はすべてto不定詞で統一する]

7. まとめ

以上、見てきたようにAPA Manualの“Grammar”は英文法すべての項目にわたるといって、網羅的、体系的、包括的なものではない。すでに述べたように、APA Manual全体の分量から見れば、文法に関する記述は「付け足し」にすぎず、正確な文章表現を目指すAPA Manualの編集方針に基づいて必要最低限のことが掲載されているに過ぎない。

Grammarの項目に関して、APA Manualには次のような注記がある。

When you develop a clear writing style and use correct grammar, you show concern not only for accuracy presenting your knowledge and ideas but also for easing the reader's task. (p.61)

[明晰な文を書き、正しい文法を使うことは、知識とアイデアを正確に提示することのみならず、読者の負担を軽減することに注意を払うことになる。]

まさにここに述べられているように、正しい文法を使うという意味は、なんとなく言いたいことが通じればよいという曖昧な態度を断固排し、自分の研究内容や論考を正確に相手に伝え、誤解されないようにできる限りの努力をするということである。そのために、APA Manualの“Grammar”の項では、言語の本質について云々する文法ではなく、上に示したようにあくまでも「何が正しくて、何が間違っているか (false syntax)」について明示し、正しい文表現となるためのルールを指示していた。

ここで、特筆すべきは、文の正誤の判断が「論理」に基づくものであり、読者はここに書かれているルールに熟知することで、意味的な曖昧のない簡潔明瞭な文とは、言い換えれば論理的に明晰な文であるということ学ぶ。つまり、文法的な文を書くことで、論理性が高まり、学術論文としての正確さが増進するわけである。理 (ratio) の原則に拠る、文章表現のルールを提示することは18世紀以来の英語規範文法の伝統を真に引き継ぐものと言える (渡部, 2004)。

おわりに

APA Manualに記載されている文法事項は、悪名高き「受験英語」なるもののルールばかりである。高校や大学の「受験」に合格するだけの目的でも、「学校文法」「伝統文法」とも呼ばれる「規範文法」を日本の学校できっちりと学んできたものにとっては、ここで示される注意事項はむしろ「常識」の範疇に属するものであろう。

今日、わが国における英語教育では「実用英語」と称するオーラル・コミュニケーションが中心になり、「なんとなく通じればよい」という風潮が重んじられ、文法などはまさに「無用のもの」として疎んじられる傾向があるようだ。しかし、日本の学校で英語の時間に教授されてきた文法事項が、英語を母国語とし、かつ知的レベルの高い人々が文章を書くために参考とするAPA Manualの中では「最重要事項」として掲載されていた。この事実が示すものは、従来の日本の英語教育が英語を話すことではなく、「英語を正確に読み(解釈し)、書く(理解する)」ことを第一に目指して

いたということであろう。一瞬一瞬で消え去る話し言葉であれば「なんとなく通じればよい」場合もあり、文法もそれほど気にせず、単語を羅列すれば事足りることもあろうが、Verba volant, scripta manent. [話したものは消え去り、書かれたものは永遠に残る] というように、「書かれたもの」は時空を超えて正しく理解される必要がある。そのために、日本の英語教育がこれまで目指してきた目標は、英語の母国語話者たちにとっても「最高レベル」と見なされている正確に書くための規範的内容の習得であったのだ。単なるコミュニケーションの手段として通じればよいというのではなく、すべての日本人に、格調高い英語を習得させ、それを通じて最高の教育を与えようとした先達の何とも良心的な一面をうかがわせる。

このように、意味を正確に伝達するための簡潔明瞭な英語を書くことを目標としたルールブックとしての規範文法の伝統は、APA ManualなどをはじめとするStyle Manual, Writing Manualとして現代も生きており、英語を母国語とする人々が正しい英語を書く際の拠りどころとなっている。日本の英語教育は今日の社会の要請に応える必要もあろうが、目先のことだけにとらわれすぎるあまりに、いままで培ってきた重要な遺産を失ってはならない。

文献

- American Psychological Association (2001): *Publication Manual of the American Psychological Association* (5th ed.). Author, Washington, D.C. [1st ed. in *Psychological Bulletin*, 49 (Suppl., Pt.2) (1952); Rev. ed. (1957); Rev. ed. (1967); 2nd ed. (1974); 3rd ed. (1983); 4th ed. (1994)].
- Eto H (1997): On the Role of German Grammarians as a Bridge between Traditional and Scientific Grammar in 19th-Century England. In K. R. Jankowsky (Ed.), *Conceptual and Institutional Developments in the Linguistic History of Europe and the United States*. Nodus Publikationen, Münster

(Westf.)/Germany.

Gibaldi J (2003): *MLA Handbook for Writers of Research Papers*. Modern Language Association of America, New York.

Murray L (1795): *English Grammar. Adapted to the Different Classes of Learners. With an Appendix, Containing Rules and Observations for Promoting Perspicuity in Speaking and Writing*. Wilson, Spence & Mawman, York.

Pinker S (1994): *The Language Instinct*. Morrow, New York.

Strunk, Jr W & White EB (2000): *The Elements of Style*. Allyn and Bacon, Boston.

渡部昇一 (2003) : 英文法を知っていますか? . 文藝春秋, 東京.

【Summary】

Grammar in *Publication Manual of the American Psychological Association*

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

In linguistics today, of which the goal is, as a branch of the exact sciences, to seek for the nature of language through observation, description, and analysis of linguistic phenomena, “grammar” does not necessarily mean a prescriptive rule-book to be used for adequate expression and communication. However, an ardent desire to speak and write a language with propriety has never ceased, and the tradition of grammar as an “art” has been handed down in a form of a writing manual or a style manual to this day. In this report, I examine example sentences in the “Grammar” of the *Publication Manual of the American Psychological Association* and indicate how such a writing manual for research papers in general plays a role as a rule-book, i.e., as prescriptive grammar, for good writing.

Keywords: prescriptive grammar, writing manual, American Psychological Association, APA Publication Manual, English education

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp